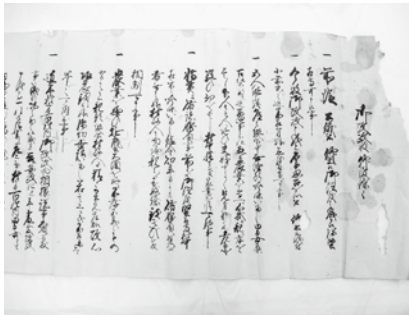


中善寺村文書について(1)

No.348
平成26年4月

平成5年のことでした。福島県いわき市に住む郷土史研究者から「千葉県の中善寺という村の古文書が古書店でまとまって売りに出されている。買わないか」と問い合わせがありました。早速購入してみると、送られてきた中善寺村文書はミカン箱一つ分で、中身はその後しばらく見ないままになっていました。

この中で、今回は慶応二年(一八六六)六月、中善寺村の領主の一人広戸家の役所から名主・組頭・惣百姓中宛に出された「御改政被仰渡條々」を紹介してみたいと思います。慶応二年六月といえ、幕府が第二次長州征討を開始した時期であり、軍費調達のため、百姓等に対しより多くの負担を強いるようになった事が背景にあると考えられます。



▲「御改政被仰渡條々」(中善寺村文書)

平成24年、私の勤務する千葉経済大学で、学芸員課程の館園実習を行わなくてはならなく、これを機会にこの中善寺村文書を整理してみようということになりました。学生たちも、本物の古文書を手にするのは初めてで、整理は遅々として進みませんでした。が、平成24年と25年の実習で54点の古文書を袋詰めすることができました。江戸期の史料は7点、明治期の史料が22点あり、あとは無年号で月日のみか、日にち等は何も書いていないものでした。

条文には、まず農業を第一

に心掛け、親に孝を尽くすこと、博打などの諸勝負は決して行ってはいけないことが書

かれています。そして、農業を嫌い大酒を好む不義不孝の者がいたら、親類や組合村役人により改心させるようにと命じています。さらに近年

「日屋利講」と称して、男女が大勢集合して酒食をするばかりか、賭け事なども行われているようだが、これを堅く禁止するとしています。「日屋利」は、いわゆる「日やり」であり、近年まで正月に集まり、その村の一年の行事を決める集まりとして伝承されてきました。そして「日やり」では皆でご馳走をつくり、花札などの賭け事もおこなわれてきました。こうした実態を把握した役所が禁令を出した

ものですが、実効があったかわかりません。また、祭礼の料理は一汁一菜で、嫁取り婚取りの祝言も一汁三菜にせよなど細かく制限が加えられています。当時の村落生活を見るうえで、好史料といえましょう。これからも史料整理を行っていきますので、新たな展開を期待しています。

茂原市文化財審議会委員

菅根 幸裕

文芸コーナー

俳句

風うなり窓辺の枯木寒気な鳥声

石井 秀二

短歌

北向きの窓から漂う筍の

炊き込みごはんああ旬を感じず

時女 礼子

温室の中は一足春模様

赤き苺の甘き香よ

山本 明美

庭石に寄添い咲いた石路の花

強く静かな二人親惚ぶ

武居 敬子

黒潮が岩をも砕く波の花

九十九里浜に春が来る

中山 重平

川柳

合格へ幾度ふったか神の鈴

吉野 千枝子

多角化へ趣味舵を切る古希の道

小林 吉太郎

細胞学人の進化へ夢繫ぎ

風間 敬造

軽妙なジョークに和む見合い席

高橋 由紀子

文化遺産和食世界をリードする

稲子 勝久

遅しく黄砂尻目にサクラサク

大井 康章

災害へ想定外が付き纏い

大久保 絵

月初め保険証持って匠者巡り

横田 清

増税をうまく乗り切る主婦の知恵

鳥海 久子

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。

●投稿は楷書でお願いします。

※俳句、短歌、川柳の原稿送付先

〒297-8511 茂原市道表1番地 茂原市役所秘書広報課宛「文芸コーナー」と朱書きしてください。